# 上島の文芸

## 水曜会【弓削】

日を弾く艶を保ちて実南天　亀島　一美

一稿を先送りして賀状書く　田坂　紫苑

綿菓子のような雲来る日向ぼこ　田坂芙代子

粕汁の味見の鮭を摘んでは　中本砂恵子

捨てきれぬ夢の二三と年迎ふ　中脇　幸造

出勤を前に大根持ちくれし　森本　恵子

## 生名短歌会【生名】

百円で島めぐりするバスありてオレンジの色会う度からっぽ　村上　宗子

財なくも子供や孫に支えられ楽しく生きんあと幾歳を　村上　司

若き日の目力強きアスリートも今は寡黙な君と化りいつ　村上　昌子

六年間姑を看取りし友は言う「後期高齢者になったのよ」と　渡辺スズ子

「チョコレートコスモス」お菓子のような花の散り風清々と晩秋に入る　池本　滝子

彼岸より君見ていますか高々と花揚げ咲く皇帝ダリヤ　浜田伊勢子

美土里町笛や太鼓のお囃子と神楽の舞に心がおどる　村上優美子

少年は虫を見ていた虫メガネいま鬱の字を覗く虫メガネ　池本　友幸

## むつみ歌会【岩城】

亡き夫の育てし柚子の実りたり冬至の夜を湯舟に浮かぶ　宮本佳世子

月の夜を川のほとりに一人来て今宵せつなく夫を偲べり　浪本　綾子

父の顔知るや知らずの妹は年忌の度に供物忘れず　池田　繁雄

病室の母と二人の忘年会吾が歌へば母は拍手す　森本　和佳

想ひ出はあけびを取りし積善山ぎざみ釣りしは津波島の磯　白石　勇

灯の消えし叔母の空家を見るたびに二度とは逢へぬ淋しさ募る　西本　優子

病室の窓より見をりビルの間を通勤がへりの人らはつらつ　池本　正子

## 魚島俳歌柳会【魚島】

寒烏賊を釣りしか墨が沖波止に紅葉散る山麓デビラ干す波止場　三上　運

電線がブレて冬西風強く吹き網を張り猫も鴉も寄せ付けずデビラ干すのも一苦労かな　大黒　丸

忘れては駄目と貰ひしメモ忘れ多機能は要らぬ使えず値も高い　佐伯　真柳

親に似ぬ娘と褒められて嬉しがりブランドは要らぬお金を貰おうか　城山　登

猪を獲る作戦籠か鉄砲かさくら植え手摺を直し島四国　柳　小福

島凍てぬ空家空墓地増え続けいの子連避けて通れる家五軒　松原　瑞峰

## 試合結果

**■第39回愛媛県団体総合バドミントン選手権大会（12月11日　愛媛県総合運動公園体育館）**

男子　4部

3位　弓削高等学校

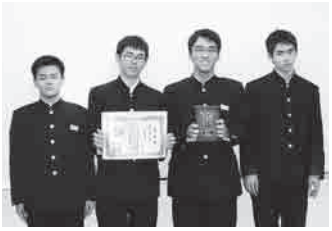
（松浦一晴・西中一馬・松下恵太・山本拓巳）

## 第7回全国高校生「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」～私の町からの報告～

## 創作作品部門　団体　佳作（全国4位）

12月4日、第7回「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」の表彰式が行われ、弓削高等学校2年の古林和真さん、佐伯流星さん、古本力さん、脇坂紀之さんが制作した「弓削島四国」という作品が、創作作品部門団体63点の中から佳作に選ばれました。

生徒のみなさんの今後益々のご活躍を期待しております。



# かみじま歴史探訪

## シリーズ・史料が物語る郷土の歴史⑪

# 島々の歌碑ものがたり

因島の山頂から上島町の一帯を眺めた遍歴の歌人吉井勇は、次のように詠んでいます。

白滝の山に登れば眼路（めじ）広し
島あれば海海あらば島

上島町への玄関口でもある因島の土生港にも吉井勇の歌碑が立っています。

島々の灯（ひ）ともし頃をゆるやかに
生名渡しの船は出づらし

建造されて間もない生名橋と弓削大橋を渡ると、インランド・シー・リゾート　フェスパ（元の国民宿舎）の丘にも、同人の二首の和歌が刻み込まれた歌碑が建てられています。

うつらうつら春弓削島にわれは来ぬ
遠くはるけきことを思ひつつ
見はるかす瀬戸のうち海しらじらと
日は照り渡り春立ちにけり

裏面には「巨匠吉井先生が、昭和十一年五月、瀬戸内海探訪の途次、この弓削に遊んで詠まれた歌…」と刻まれています。

吉井勇の歌碑（弓削）

高知県の山峡、猪野々の渓鬼荘に隠棲していた吉井は、昭和十一年の春、歌行脚の旅に出て、四国路から瀬戸内海へ、さらに中国、九州路にわたる大遍歴の旅に出た模様です。当時の吉井は、妻と別居後に離婚、また中央の歌壇からも疎外されるといった状況で、彼の人生は重大な岐路に直面していました。

渓鬼荘を後にした吉井は、昭和十一年四月、まず香川県の琴平町に回り、ここで短歌新聞の愛媛支局の責任者であった和田義一（故人）と落合ったらしい。その後、当時の宇摩郡川之江町・金田村を経て、西条市に入り、菊水という旅館に宿泊。ここで地元の文化人たちと歓談。さらに今治市に立ち寄り、波止浜町の有志の案内で来島海峡の小島の別荘に宿泊したのち、松山市に滞在、道後温泉にも足を運んでいる。

続いて、砥部・郡中・上灘・長浜・大洲町と泊まりを重ね、宇和町から八幡浜市に入った。ここでの案内役は、地元の高等女学校の先生であったそうです。

南予から反転して、松山市の外港、高濱港へ引き返し、今治からいよいよ瀬戸内海の島めぐり。まず今治から広島県の大崎島の木ノ江港へ、木ノ江から再度、愛媛県へ。大三島の大山祇神社に参詣したのち、しばらく伯方島に滞在。その後、現上島町の岩城島の三浦敏夫家の別宅に宿泊している。

三浦家は江戸時代から明治期にかけての大地主で、塩田経営や回船業のほかに木綿の取引等にも進出、その取引先は江戸や大阪まで拡がっていたらしい。庄屋の役宅でもあった三浦邸は、「島本陣」と呼ばれているように、参勤交代の途次に松山藩主の宿泊もなされています。この「旧島本陣三浦邸」は現在は岩城郷土館に変身して、貴重な関係史料が展示されています。この三浦邸に宿泊した吉井は、次の歌を詠んでいます。

牧水がむかしの酒のにほひ（い）して
岩城の夜は寂しかりけり
ありし日の友のことごと思ふ（う）からは
岩城の夜はねむりかねつも
（三浦敏夫『島の歌碑守』より）

この三浦家の十八代当主の敏夫は、若山牧水と親交を深めた歌人で、牧水が創刊した短歌雑誌『創作』の同人でもありました。その牧水を吉井勇が偲んだ作品です。三浦家の当主敏夫も次のように詠んでいます。

牧水が歌集を編みし庵なりと
吉井勇がとめ来たりけり
牧水が歌詠みし部屋に勇等を
招ずと床に花を吾が生く（同前）

その牧水が生涯を閉じてから三十数年後の昭和三十八年に三浦敏夫は、自邸（島本陣）の中庭に、牧水とその妻の喜志子の歌二首を刻んだ碑を建てています。

岩城から弓削島に渡った吉井は、医師の村上元三郎の別荘に滞在、その数日はまことに楽しいものであったらしい。その一夜、近隣の有志によって歓迎の宴が催された。一人の新任教師は、その席に同席するように校長に勧められ、断り切れずに参加した。「会費五円は、月給の一割ほどで大変でした。」という逸話も伝えられています。吉井はこの歓迎会のあと、因島から尾道へと西下の旅を続けました。歌行脚の先導となった和田義一の子息、純一は「この巡行こそが吉井の未来を決定したのではないか」と語っていたそうです。（弓削、田坂與紹氏談）

上島町の島々には、もっと異質の歌碑も遺されています。『魚島村誌』には漢詩が彫り込まれた大林総本家の墓碑が紹介されています。その墓碑には、「先考（亡くなった父）南溟先生病中吟。臥遊垂死息秋空、楽土西涼画辟中、談笑諸君豊変歳、仙豪万転向奇功」と七言の漢詩が、裏面には「天保六（一八三五）年極月建之」と彫られています。（写真は魚島支所より提供いただきました）

このように、上島町の島々には早くから文芸活動が深められていたのです。誇ることができる遺産なのではないでしょうか。

漢詩の碑（魚島）

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授
上島町文化財保護審議会顧問　村上　貢　稿